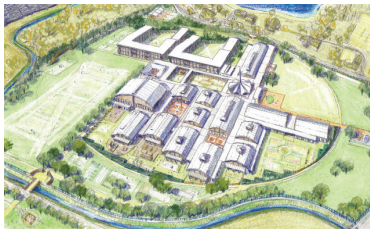
「先進的な学び舎」の理想を大崎上島で具現する



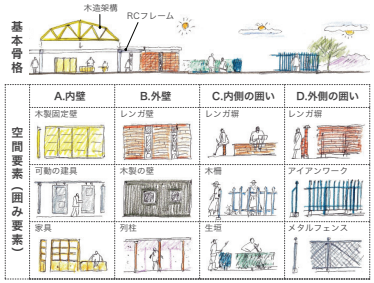
基本理念 － 自然を生かした先進教育を生み出すための －

1．親しみやすいスケールの建築をつくる
生徒の毎日の生活を優しく包み
島の美しい自然と融和し、
将来の変化、成長に応ずるかたち
→分棟配置を基本とする

2．多様な空間を内包する建築をつくる
先端的な教育に対応し、
毎日を校舎と学寮で過ごす生徒を元気づける
多様で変化に富む空間
→均質で閉じた空間ではなく、
多様で開いた空間をつくる

3．わかり易い明快な秩序を持つ建築をつくる
多様性を追求するといって、
全体がわかりにくい、混乱した構成になってはいけない
→わかり易い全体の輪郭を持ち、
明るい中心を持つ空間をつくる

基本手法 － 秩序と多様性を生むための －
明快な「基本骨格」と多様な「空間要素（囲み要素）」



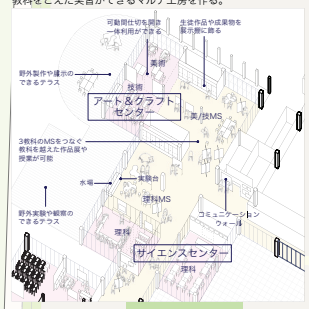
セキュリティーと地域との一体性が両立する配置

早期開校と分離発注が可能な配置

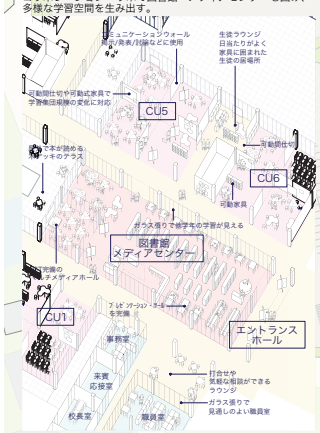
・初年度工事は3つのエリアに分割し、
無理のない平行工事を可能ととす
ことで早期開校を実現。
・必要最低限の初年度工事によって、
学校の「顔」となる南側のファサー
ドが構築可能。
・次期工事は施設利用者動線との交錯
が無く、学校生活の安全性を確保し
た施工計画とする。
・スマートラインを初年度に整備し、
次年度工事の際に利用している居室
への影響を最小限とする。

多様で居心地のよい単位空間、それをひとつに統合することで、学びと生活が一体となった真の「全人教育の場」をつくる

アート＆クラフトセンター×サイエンスセンター
2つのメディアスペースを一体化して、
教科をこえた実習ができるマルチ工房を作る。

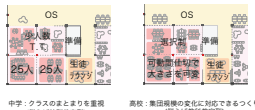


コラボレーション・ラボ×図書館・メディアセンター
コラボレーション・ラボで図書館・メディアセンターを囲み、
多様な学習空間を生み出す。



規則的な木架構のモジュールによって、学習集団の大きさの変化に
柔軟に対応した学習空間を作ることができる。

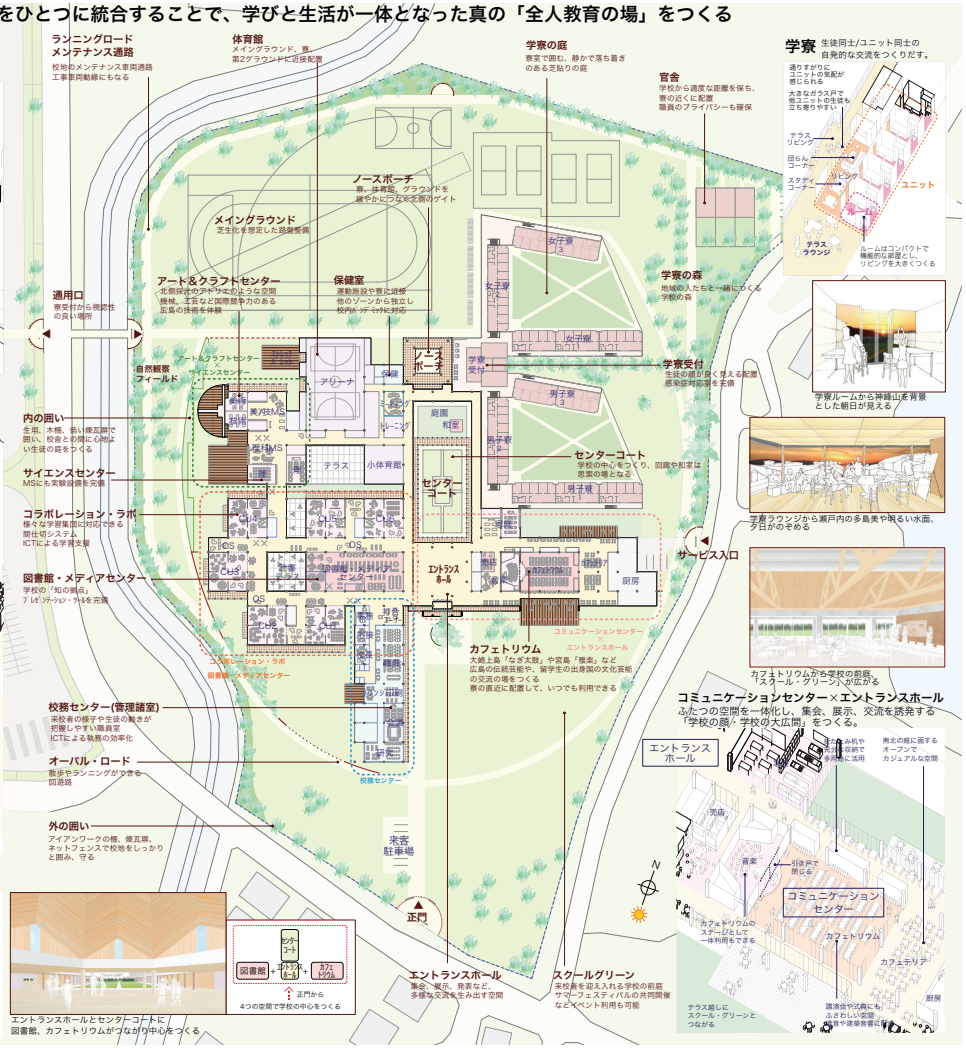
共通フレームで中学/高校に最適な教室ユニットをつくる



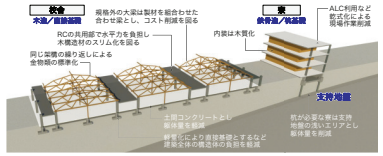
中学：クラスのまとまりを重視
（例えば特別教室型）

高校：集団規模の変化に対応できるつくり
（例えば教科教室型）

エントランスホールとセンターコートに
図書館、カフェトリウムがつながり中心をつくる



コミュニケーションセンター×エントランスホール
ふたつの空間を一体化し、集会、展示、交流を誘発する
「学校の顔・学校の大広間」をつくる。



教室ユニットのイメージ

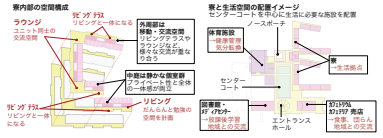
私たちは以上の提案を基本として、広島県や大崎上島の関係者、教育者、地域住民、
そして将来の生徒保護者と共に考え、それぞれの想いを実現するパートナーとなります。

自己の自律と人との絆を学ぶ、教育の場としての学寮
共同生活は、自由・自律と同時に他者との関係を身につける最も重要な
教育の一部であり、心地よい家であると同時に教育の場でもある。

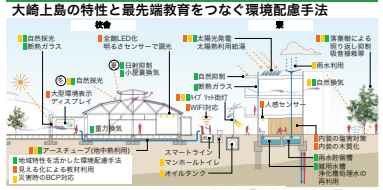
生活集団を作り、多様な交流をうながす
共に学び、支え合う絆を育むため、様々なまとまりをもつ生活空間をしつらえ、
生徒相互やユニット相互の自発的な交流をうながす仕組みをつくる。
・寮ユニットのなかに、寝室とは別に 団らんや学習の場となるリビングを作る。
・寮ユニットをこえた交流を生み出すテラスラウンジやテラスリビングを用意して、
ユニットで完結しない関係性とする。
・カフェテリアやカフェトリウムも寮の一部で、大きな団らんの場となる。

校舎と寮で施設を合理的に活用する
校舎と寮を緩密につなぎ、生徒の学習と豊かな生活を支える環境を用意する。
・校舎と寮がセンターコートを囲む配置。
・朝夕の食事スペースや放課後の自習スペースにアクセスしやすい。
・コミュニケーションセンター、運動施設、和室など多彩な生活空間を寮近傍に配置。
自主的な活動、自然な交流の場にもなる。

生徒と管理者の適切な関係で、安心してすごさせる環境を用意する
多感な年齢のこどもたちの生活を預かる施設として、安全確保や危機管理に加え、
問題が生じた場合には早期に察知できる構成とする。
・皆会は寮へすぐにアクセスできる位置。
・個室は集中できる環境としつつ、中庭を囲む一体感のある配置。
・共用廊下からユニット内の気配が感じられるしつらえとする。



大崎上島の特性と最先端教育をつなぐ環境配慮手法

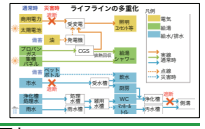


多角的な視点で
適正な環境配慮手法を選定
・海に囲まれ自然豊かな「島の学校」
ならではの環境配慮手法を選定。
・「みえる化」による教材利用や災害時の
BCPにも対応可能とするなど、高い付加
価値をもつ計画。
・植栽は島古来の在来種の林や果樹園など
を配置し、地域の生態系や農業に対して
の「学び」になるがフィールドを形成。

環境負荷低減手法	CO2排出量	年間発電量
自然採光	3.0%	3.3%
自然換気、外気冷房、外気導入制御	6.1%	3.2%
アースチューブ（地中熱利用）	0.2%	0.1%
太陽光発電・太陽熱利用給湯	0.5%	0.2%
トップランナー変圧器	1.6%	2.0%
LED、高効率照明器具の採用	5.6%	3.2%
人感センサー・調光制御	1.8%	1.0%
人感センサー・調光制御による照明制御	4.3%	3.3%
雨水利用のCO2削減（空調エネルギーの削減）	1.0%	0.4%
高効率空調機・全熱交換器	4.5%	1.3%
開放・浄化槽設置水を雑用水として利用	0.5%	3.0%
計	28.9%	23.4%

運用における年間CO2排出量 運用における年間光熱水費
従来型に対して 29%削減 従来型に対して 23%削減

施設を守り、命を守る生活継続施設
・島が孤立し、物資供給が途絶した際にも
400人の生活に充分な備蓄を確保。
・ライフラインを多重化し、電力途絶の際
のエネルギーを確保。
・建物は平屋・低層化することで、災害時
の落下被害の軽減・容易な復旧が可能。
・地震時に応力集中を起こさないバランス
の取れた構造体。


ライフラインの多重化
通常時
災害時
発電電力
太陽電池
安定電力
電力
自家発電
ガス
ガスタービン
発電機
CGS
排熱回収
給湯
暖房
冷房
電力
ガス
水
電力
ガス
水
電力
ガス
水